

(「発達の違いと教育」1995年1月号)

依頼原稿 (字数 400×4.5)

予後研究からみた自閉症教育への提言

小林 隆児

(東海大学教授・健康科学部設置準備室\*)

\* 〒259-11 神奈川県伊勢原市望星台

TEL (0463) 93-1121 内線4152

FAX (0463) 91-3070

一九九〇年春、筆者らは二〇一例の自閉症児に関する追跡調査を行った。今回の転帰は従来のわが国の調査結果と比較してかなり改善を示していた。今回の対象児はわが国での自閉症児療育の黎明期に幼児期・学童期を過ごしていたことがそのひとつの要因として考えられた。また、軽度ないし中等度の発達遅滞群では療育環境いかんによって予後は大きく左右され、けっして幼児期の発達水準のみ~~に~~で予後を占うことはできないことが分かった。ではこれらの結果はわれわれ自閉症療育者に何を投げかけているのであろうか。

昨今、自閉症研究は医学領域での活発な生物学的研究に代表されるように、自閉症の脳障害仮説が多くの研究者によって支持され、彼らに認められる多彩な障害像を描き出すことに多くの研究者は奔走しているようにみえる。しかし、彼らの予後像は実に多彩できわめて広範な発達水準と臨床像を呈していることがわかる。そして特に強調されなくてはな

らないのは、従来就学時前後の言語機能を中心とした知的機能の発達水準が彼らの予後を決定するという自閉症予後悲観論に対して多少なりとも批判的な結果が示されていることであろう。正常知能水準の例でも悲観的な転帰をたどっていたり、その逆の場合が認められ、特に軽度から中等度の知的発達の遅れを示す例ではその転帰に大きな幅があった。いかに誕生後の療育環境が重要かを間接的にではあるが示唆しているといえよう。

従来の自閉症療育は、少しでも認知機能や言語機能の向上を図ろうとすることにその努力の多くが割かれ、そこでは彼らの発達のテンポや自主性は省みられることが少なかった。早期診断と早期療育が彼らの主体性を無視した訓練主体の療育になってはいないかどうかを再度見直す必要がある。一人一人の生きざまがすべて異なるように、自閉症児一人一人の理解と対応の重要性は理念的には従来から叫ばれてきていた。しかし、現実には彼ら

の障害像のみが前面に描きだされ、彼らも人間としての歴史性を背負った一存在であることを正面から描きだし理解しようとする試みを、過去にどれほどまでに行われてきたであろうか。

障害児教育の最大の目標は彼ら一人一人が主体性をもって自らの力を最大限発揮して社会の一構成員として生きていくことを可能な限り援助していくことにある。このように考えていくと、自閉症の療育が乳幼児期から成人期まで一貫性をもって行うことの必然性と重要性が浮かび上がる。わが国でも早期療育がかなり普及し、以前に比べ自閉症の病態は随分軽症化しつつある印象をもつが、幼児期の療育から学校教育へと移行する段階での連続性のなさが大きく切実な問題となってきた。つある。幼児教育と学校教育の連続性と一貫性のなさが現実には思春期・青年期自閉症の臨床上の諸問題に大きく関わっている現実を今後いかにして改善していくか、今早急に問

われているテーマである。

筆者が現在の職場に移るまでは医学系の教官として教員養成系の大学に在籍していたが、障害児教育カリキュラムの内容はほとんど教員の自由裁量によって行われていた。最低限の教育到達目標もなんら整備されておらず、教員の専門性もきわめて狭小化し、教育や指導の内容も非常に偏在化していた。現場の教師になるためになが必要かという視点よりも教官の研究の好みに合わせた指導が行われているという実情を目の当たりにして驚かされた。なんらかのハンディキャップを持った一人の子どもに接する際に、彼らを理解するための基本的な心構えや対応のあり方を身につけていくためには、実践的な臨床経験に裏付けられた臨床能力が強く求められる。障害児臨床はライフサイクルの視点から捉えていくことがことのほか重要で不可欠な視点であることは今や常識化しつつあるが、その実現化のためには教育に従事する者は従来のや

やもすると閉鎖的になりがちであった世界から脱皮し、医療・教育・福祉あらゆる分野との幅広い実践的な繋がりを求めていく努力を行うことが不可欠である。そのような日々の努力があって初めて自閉症教育に光明を見いだすことができるようになるのではなからうか。

【参考文献】

小林隆児・村田豊久（一九九〇）「二〇一例の自閉症児追跡調査からみた青年期・成人期自閉症の問題」発達心理学と医学 第一巻 五二三―五三七。

Kobayashi, R. et al. (1992). A follow-up study of 201 autistic children in Kyushu and Yamaguchi Areas, Japan. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 22, 395-411.